

国語問題

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は 24 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙（マークシート）の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。
4. 解答は必ず国語解答用紙（マークシート）の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。

5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、

20

 と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の③にマークしてください。

例

解答 番号	解					答					欄				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
 - (3) 解答用紙へのマークはすべて HB のシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧に消し、消しきずはきれいに取除いてください。
 - (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
 - (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
6. 国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。
 7. 試験時間中に退場することはできません。
 8. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
 9. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

言語は私たち人間が世界の意味を理解する際に、無意識のうちに經由するメディアである。メディア media はラテン語の medium の複数形で、「中間にあるもの」「媒介物」を意味する。人間（認識主体）と世界（認識客体）とのあいだに媒介者として——その意味で、第三者として——介入しながら、認識主体である私たちの世界認識に影響を与え、規定するものである。

私たちは外部世界をそのものとして、ダイレクトに把握しているわけではない。物理的なことを考えても、私が人間という生物であれば、人間という種に自然と備わった肉体（感覚器官）によって、私に与えられる外部世界の情報は工作されている。人間である私たちが見ている、聞いている、感じている「世界」は、人間の肉体的条件によって与えられたデータの世界であって（「データ」とは、語源的にも、「与えられたもの data」である。漢語で言えば「所与（与えられたところのもの）」である）、外部の生の世界ではない。そして、そうしたデータを与える媒介（メディア）なくして感覚も認識もないのであれば、私たち生命体がアクセスできる世界は、徹頭徹尾、身体という感性的メディアによって規定されており、有限だと言える。近代哲学の確立者イマヌエル・カントが言う「現象」と「物自体^{*2}」との峻別^{しゅんべつ}も、その抽象的かつ高度に複雑な議論を日常的な言葉に翻訳してしまえば、これと同じことを言っている。カントは、「物自体」の世界は認識しえず、認識主体はみずから現れる（「データとして与えられる」「現象界」にしかアクセスできないと述べ、そうした認識の有限性のなかに、同時代のニュートン物理学をはじめとする近代科学を基礎づけたのである）。

もちろん、言語のメディア性は身体⁽²⁾のそれと同じではない。身体の感性的メディアを第一段階のメディアと呼ぶなら、言語は、身体的条件によって与えられたデータをさらに歴史的・社会的記号によって意味づける第二段階のメディアである。身体によって与えられたデータ（感覚）が身体的条件によって大きく左右され、いわば「生々流転^(b)」する運命にあるのに対して、言語はその時間（世代）と空間（個体）を超えた伝達力のために、身体をはるかに超えた「持続性」をもつ。物理的条件である時空を超えたこの「連続性」がある種の「共同性」、さらには「統一性」と言う感覚を与えることは確かである（**A** それ「幻想」あるいは「キョコウ」⁽⁷⁾ だとしても）。

この言語による「連続性」効果のもとで、私たちは同じ言語を刷り込まれ使用するうちに、言語的共同体（言語による共通性）を「実在」的共同体と感じるようになり、私たちは世界を認識し、意味づけ、行動する際に、蓄積され構築された言語的「現実^{リアリティ}」に——この言語的「現実」は、

物理的「現実」、外在的「現実」とは異なるにもかかわらず——足場を置くようになる。はては言語的現実を「現実」そのものと思ひ込む場合さえ生じてくる。言語はまさに「現実」を作り上げる力なのである。それをマクルーハン流に、「メディアがメッセージだ」と言ってもよいかもしれない。私たちはその「第二の現実」——「第一の現実」を物理的現実とすれば——の拘束から簡単には自由になれない。社会は人間にとって「第二の自然」であるとはよく言われるが、社会的紐帯ちゆうたいを築き上げる言語は「第二の自然」——むしろ人間にとっては、「第二」ではなく「第一」の価値さえもつ「自然」(nature) = 「本性」(nature)なのである。

(中略)

言語を「替える」ことは、発想や行動を「変える」**B**有効な手段の一つである。ソシユール*4が言うように、「言語は観念を表現する記号の体系」であり、数あるメディアのなかでも、直接的に思考に結びついているからだ。言語を替えれば、如実に思考が変わる。まるでコンピューターのOSを切り替える場合のように。メッセージは同じ内容であっても、言語を替えてそれを表現すると印象が変わったり、さらにその内容自体が違ったものになることは、通訳や翻訳をすれば、誰もが経験することである。

そのことは外国語を学ぶ大きな動機の一つであろう。外国語を学ぶことによって違った世界、文化に触れたい、違った人々と交流したいという願いの裏には、違った自分になりたい、自分を変えたいという変身願望が多少なりともあるだろう。翻って考えてみれば、言語の世界構築力は拘束力でもあるからだ。言語というメガネによって視野が与えられるということは、そのメガネによって世界の見え方が左右されるということでもあり、そのメガネが見せてくれるもの以外は見えないということでもある。可能性は限界でもある(これこそ、カントが「可能性の条件」として問うた問題そのものであった)。世界を見る可能性を与えると同時に制限を課すメディアである言語、これを新しく獲得しなおすことで、メガネを交換するかのごとく、一つの言語世界の拘束を離れ、新たな世界が与えられる。外国語を学び、新しいまなざしを手に入れることによって、現状を離脱した新しい「私」に変身する可能性が与えられる。

この可能性は重要である。しかし、この可能性を追求するだけでは、本当に言語の拘束から自由になることはできない。なぜなら新しい外国語における新しい自己は、その新しい言語によって「与えられた」ものでしかないからだ。⁽⁴⁾それが新しい言語への取り込みでないという保証はない。言語実用主義やシステム主義の隘路あいちろうを論じたときに問題になっていたのも、まさしく、言語(システム)による変身が体制への動員や馴致じゅんち(飼いや馴らし)にすぎなくなる恐れであった。とりわけ強力なシステムの選択は、擦り寄りや同化吸収になりやすい(そうした強い取り込みの力、利

益誘導の力をもつからこそ、そのシステムは強力なのである。そうした場合、自己の可能性の拡張を求めた結果が、そのシステムへの依存という、むしろ可能性の縮減・制限へと逆転する。ある拘束状態から逃れようとして、別のさらに強力な拘束状態に陥ることは、人間社会によくあることである。

C、言語の例にかぎらず、まったく拘束のない状態などありえないのだから、自己の可能性をより拡張してくれるシステムの拘束を選択するほうが「賢い」というニヒルな考え方もあるだろう（この発想を洗練させると、「最大多数の最大幸福」によって正当化される「功利主義」になる）。しかし、どれほど複数の言語間をオウダンしようとして、この行き方では、結局のところ、一つのシステムに同化することによって自己確立を達成しており、本⁽⁵⁾当に複数の言語のあいだで生きていることにはならない。最終的に一つの特権的なシステムを選択するために（すなわち、自己の利益に適^{かな}わないシステムを「選別」するために）、複数の言語を眺め渡しているにすぎない。その場合、外国語の複数性は唯一の言語にたどりつくための仮初めの通路、一時的なステップにすぎず、**D** カタログで商品を選ぶときのような選択肢の一つにすぎない。そのような選択肢は、選別のあり方は、実際のショッピングでよくあるように、どれほど消費者の自由に任されているように見えても、実はある特定の方向に、すなわち現状において力をもつ流れへと誘導されている。その誘導自体がもつ権力性や暴力性、さらにはそもそも何が選択肢として提供されるか（カタログにどのような商品が掲載・登録されるか）あるいは提供されないのかについての決定権（選択肢自体の選択）といった問題——これらは可能性の排除の問題である——が問われずにホウチ^(ウ)されているのである。

（藤本一勇『ヒューマニティーズ外国語学』より。出題にあたって、本文を一部改変した。）

*注1 イマヌエル・カント (1724-1804) ドイツの哲学者で、認識の限界を確定する批判哲学を提唱した。

2 物自体 感覚など、現象の源泉として想定し得るが、それ自体は認識し得ぬもの

3 マクルーハン ハーバート・マーシャル・マクルーハン (1911-1980)、カナダの英文学者・文明批評家で、独自のメディア論を提唱した。

4 ソシユール フェルディナン・ド・ソシユール (1857-1913)、スイス出身の言語学者で、主著に『一般言語学講義』がある。

5 隘路 狭くてけわしい道。困難。障害

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア)

(イ)

(ウ)

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 匿
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 底
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) キヨコウ

- ① 去
- ② 居
- ③ 許
- ④ 虚
- ⑤ 抛
- ⑥ 功
- ⑦ 興
- ⑧ 候
- ⑨ 構
- ⑩ 項

(イ) オウダン

- ① 央
- ② 横
- ③ 応
- ④ 往
- ⑤ 黄
- ⑥ 段
- ⑦ 談
- ⑧ 断
- ⑨ 暖
- ⑩ 団

(ウ) ホウチ

- ① 豊
- ② 法
- ③ 報
- ④ 宝
- ⑤ 放
- ⑥ 地
- ⑦ 治
- ⑧ 知
- ⑨ 置
- ⑩ 致

問二 傍線部(a)・(b)の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)

(b)

(a) 徹頭徹尾

- ① 初めから想定した通り
- ② 誤解を恐れずに言えば
- ③ 最終的な結論としては
- ④ 矛盾なく筋を通せば
- ⑤ 最初から最後まですべて

(b) 生々流転

- ① 様々に形を変えながらも長く続いていくこと
- ② 常に活動していて沈滞や腐敗がないということ
- ③ 元は同じであったものが異なる運命をたどること
- ④ 絶えず生滅を繰り返して移り変わっていくこと
- ⑤ 本質を大切にしつつ新しさも取り入れること

問三 空欄 A・B・C・D に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

6

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | A | もし | B | おおいに | C | そうして | D | いわば |
| ② | A | たとえ | B | きわめて | C | もちろん | D | あたかも |
| ③ | A | ましてや | B | いかにも | C | いっぽう | D | むしろ |
| ④ | A | かりに | B | たいへん | C | むろん | D | あるいは |
| ⑤ | A | もちろん | B | まさしく | C | もとより | D | まるで |

問四 傍線部(1)「同じことを言っている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

7

- ① 人間と外部世界とは情報によって媒介されるものであるということ
- ② 人間の感覚データは外部世界の一部を構成することができるということ
- ③ 外部世界は人間の認識に影響を与え、規定するものであるということ
- ④ 人間は外部世界をダイレクトに把握することができないということ

問五 傍線部(2)「言語のメディア性」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① 私たち人間と外部世界とを媒介するもので、外部世界の情報を加工せずに直接伝えてくれる性質
- ② 感覚や認識の元となる外部世界のデータを、人間の感覚器官で処理できるようにしてくれる性質
- ③ 感性的メディアによって与えられたデータを意味付け、時空を超えて伝達することのできる性質
- ④ 身体によって与えられた感覚データを、歴史的・社会的記号に置き換えて世の中に発信する性質

問六 傍線部(3)「メディアがメッセージだ」が本文中において意味する内容を、国語記述解答用紙に、六十文字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

				5
60				15

(この枠は下書き用です。別紙の国語記述解答用紙に記入のこと。)

問七 傍線部(4)「それが新しい言語への取り込みでないという保証はない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① 外国語を学びこれまでの言語的拘束を離れたつもりでも、単に新たな言語の拘束下で世界をとらえているだけかもしれないということ
- ② 新たに外国語を学んだとしても、その言語を使うことによってその言語圏の文化をすべて吸収してしまえるわけではないということ
- ③ 新しく外国語を学んでも、それによってすぐに発想や行動が変わり、新しい「私」に変身できるわけではないということ
- ④ 自らの意思で新たに学ぶ言語を選択したつもりでも、結局は世界的に影響力のある言語を選んだに過ぎない可能性があるということ

問八 傍線部(5)「複数の言語のあいだで生きている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- ① 強い取り込み力、利益誘導の力のある特権的な言語システムを選択できるように、複数の言語の習得に努めるということ
- ② 言語は自己の可能性を拡大してくれる側面があるので、特定の言語に飛びつくことなく、慎重に選択しているということ
- ③ 複数の言語を渡り歩かなければ、唯一有用な言語にめぐり合うこともできないから、定期的に使用言語を替えるということ
- ④ 自己の可能性を制約しないためにも、複数の言語から一つを選択するやり方をやめ、特定言語の拘束を離れるということ

Ⅱ 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

パッヘルベルの『カノン』のメロディーが聞こえてきた。

僕は目を閉じて天井を見上げ、大きく、胸のリンカク(ア)を確かめるように息をつく。オルゴールの音色の『カノン』は、いままで聴いたどの音楽よりも美しく、悲しい曲だった。

「一刻を争う状態というわけではありませんが、朝からは、もう病室に詰めていただいていたほうがいいかと思えます」^(a)

永原先生は静かに言った。当直の医師の連絡を受けて、いまから病院へ向かうのだという。

血圧が下がり、チアノーゼ*iも出てきた。熱はさらに高くなり、尿が止まった。すでに延命処置に入っていて、おそらく意識が戻ることはないだろう、とのことだった。

すでに日付は変わっている。

⁽¹⁾ 僕たちはもう、その日を生きている。

リビングで、和美の両親に電話をかけた。思っていたより冷静に話を聞いてくれた。

八十歳近い和美の父親は、苦しませないでやってくれ、と凜りんとした声で僕に言った。たとえ自分たちが病室に駆けつける前でも、和美が苦しんでいるようなら、無理に待つことはせず、延命装置をはずしてやってほしい——遠いふるさとに暮らす年老いた両親も、ゆつくりと時間をかけて、その日の準備をしていたのかもしれない。

留守番電話にメッセージを残しておくつもりで工藤くんの携帯電話を鳴らしたら、電話はすぐにつながった。

(中略)

工藤くんへの電話を切ったあと、風呂の支度をした。時刻は夜中の二時近かったし、寝る前に汗は流していたが、おそらく明日——正確には今日からは、風呂にもろくに入れないだろうし、少しでもさっぱりとした体で和美に会いたかった。

浴槽にお湯が溜まるまでの間に、寝室のクローゼットから喪服を出した。

二度目の入院をする直前、和美はちょっとした悪戯いたずらを僕に仕掛けた。喪服の衣装ケースにメモを入れたのだ。へとうとう、この日が来ましたね。いままでお世話になりました。ほんとうに感謝してるし、わたしは幸せでした。お葬式では面倒をおかけしますが、喪主として、堂々と（泣いたりせずに）⁽²⁾ がんばってください。いままで、ほんとうにありがとうございます」

もつとも、その悪戯の悲しさに耐えきれなかったのは、和美自身だった。「いいものを見せてあげようか」と、自分から衣装ケースを開けて、メモを取り出したのだ。

僕は本気で怒った。⁽³⁾ 悲しさというより、悔しさのほうが強かった。

和美も「そんなに怒らなくてもいいじゃない」と言い返し、僕も腹立ちまぎれにメモを破り捨てて……それが、僕たちの最後の夫婦喧嘩だった。怒らなければよかった。いまになって思う。メモをこっそり衣装ケースに入れたときよりも、それを結局自分から打ち明けてしまったときの和美の気持ち(4)が、いまなら、わかる。

メモを破らなければよかった。

ずっと持っていたかったし、持っていなければならぬメモだったのだと、いま、気づいた。

リビングに戻ると、パジャマ姿の健哉が立っていた。目が赤い。「パパ、さっきの電話……」と切り出す声も湿って、くぐもって、揺れていた。僕は黙って、かすかに微笑んでうなずいた。⁽⁵⁾ それだけで伝わった。健哉はソファに座り込み、永原先生からの電話を受けたときの僕と同じように、ゆっくりと大きく息をついた。

健哉はこの半年間で、ずいぶんおとなになった。きっと、まだ子どものままでいてもいいところまで、おとなになってしまったのだろう。

「すぐ行くの？」

「いや……いますぐどうこうっていうんじゃないから、七時ぐらいに家を出ればいいよ。だから、まだ寝ていいんだ。六時に起こすから、それまで寝てろ」

「そういうものなの？」

意外そうに、健哉は訊きいた。少し拍子(b)抜けして、そして不服そうでもあった。

僕だって、本音ではそうだ。昔——まだ家族の誰かが死んでしまうなど想像すらできなかった頃は、ひとがキトク(イ)に陥ったときはもつとあわたましいものだと思っていた。とるものもとりあえず病室に駆けつけても、臨終に間に合うかどうか。そんな場面を、ドラマや漫画や小説で何度も見てきた。

だが、現実とは違う。時間はゆっくりと流れる。事故やキユウセイ(ウ)の病ではないせいだろう。半年間、和美は病氣と闘ってきたのだ。苦しい思いをしてきたのだ。最後の最後は、ゆっくりでいい。

(中略)

お湯に浸かって、湯気のため息を溶かしていたら、ドアの向こうにひとの気配がした。

「ねえ、パパ」

健哉はドアを開けずに言った。

「僕……知ってたよ、もう、だいぶ前に。ママが死んじゃうかもしれないって、わかってた。ダイもわかってた。僕に言ったりとかしてないけど、あいつもわかってたと思う」

「そうか……」

僕は音をたてないように、浴槽のお湯で顔を洗う。

「なんでママだったんだろうね」

健哉は涙声で笑う。

「長生きしてるひと、いっぱいいるのに、なんで僕のママだけ、病氣になっちゃったんだろうね……なんでだろうね……運が悪いよね、サイテーだよ、こんなの……ママのせいじゃないのにね……」

僕はなにも応えず、今度はわざと音をたてて顔を洗った。何度も何度も、健哉がドアの前から立ち去ったあとも、ビシャビシャと飛沫しぶきを散らして顔を洗いつづけた。

髪を洗う。

シャンプーだけでなく、リンスも使う。

頭からシャワーを浴びて、手探りでリンスのボトルを取ったとき、なにか、はるか彼方にいる大きなものに叱られて⁽⁶⁾いるような気がした。おまえは妻が死ぬ日にも髪を洗い、リンスまでする男なのか——叱られたかったのかもしれない。

だが、僕はていねいにリンスに髪をひたし、ていねいにシャワーのお湯ですすぐ。

それが僕の日常で、僕の明日からの日常は、もう今日の和美との別れを受け容れている。

風呂からあがって髪を乾かし、歯を磨いておこうと洗面台の棚に手を伸ばした。

スタンドに立つ歯ブラシは三本。青が僕、黄緑が健哉、白が大輔。和美は入院前に、自分の赤い歯ブラシを処分していた。

手回しがよすぎるよな、と苦笑した顔が鏡に映る。鏡の中の自分と目が合うと日常を保てなくなりそうなので、そっぽを向いて、歯ブラシを取った。

和美の入院前に取り替えたきり、三カ月も使いつづけてきた歯ブラシは、毛がいびつにひしゃげて広がっていた。健哉や大輔の歯ブラシも同じだった。ホームヘルパーもそこまでの面倒は見てくれない。

こんなブラシで、子どもたちに今朝の歯磨きをさせたくはない。たしか和美は歯ブラシをいつも買い置きしていたはずだ……と、洗面台の上の吊り戸棚を開けてみた。

あった。

四本——青と、黄緑と、白と、そして赤。

パックに入ったままの赤い歯ブラシをそっと棚から取り、手のひらに載せた。まなざしが揺れる。手のひらも震える。

退院したら使うつもりで買ったのか。つい、いつものように自分のものも買ってしまったのか。それとも、病気になる前に買っておいたものなのだろうか。

和美のわが家の日常が、ここに⁽⁷⁾あった。断ち切られた日常が、ここに、確かにあった。

透き通った赤い歯ブラシを、両手で包み込むように握った。その場に膝をついて、体を倒し、肘も床について、歯ブラシに祈りを捧げるような

姿勢で、僕は泣いた。

和美の名を何度も呼んだ。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、と繰り返した。

床に倒れこみ、手足をばたつかせて、僕は家族の誰よりも幼く涙を流しつづけたのだった。

(重松清「その日」『その日の前に』より)

*注1 チアノーゼ 血液中の酸素が不足したため、つめ・くちびるなどの部分が青黒く見えること

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 11

(イ) 12

(ウ) 13

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 匿
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 底
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) リンカク

- ① 隣
- ② 倫
- ③ 臨
- ④ 輪
- ⑤ 林
- ⑥ 覚
- ⑦ 核
- ⑧ 格
- ⑨ 郭
- ⑩ 画

(イ) キトク

- ① 既
- ② 危
- ③ 起
- ④ 規
- ⑤ 奇
- ⑥ 徳
- ⑦ 督
- ⑧ 匿
- ⑨ 篤
- ⑩ 特

(ウ) キユウセイ

- ① 旧
- ② 急
- ③ 窮
- ④ 救
- ⑤ 求
- ⑥ 精
- ⑦ 整
- ⑧ 制
- ⑨ 生
- ⑩ 性

問二 傍線部(a)・(b)の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)

14

(b)

15

(a) 一刻を争う

- ① どんなに工夫しても間に合わせる事ができない
- ② どちらが先になるかをお互いに競い合う
- ③ 終了に向かつて少しでも有効に時間を使う
- ④ どちらの用件に時間を費やすべきか悩む
- ⑤ 少しの時間も無駄にできず急がなければならない

(b) 拍子抜けして

- ① 張りつめていた気持ちがゆるんでしまい
- ② なんとなく不快な気持ちにさせられてしまい
- ③ 必要なことをし忘れた気になってしまい
- ④ ふさわしいタイミングを逃してしまい
- ⑤ 責任を問われているような気になってしまい

問三 傍線部(1)「僕たちはもう、その日を生きている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

16

- ① 和美が自分たちのそばにいない日々が続いているということ
- ② 和美の死を折りこんだ生活が進められているということ
- ③ 和美の寿命が十分に尽きてしまう日が始まったということ
- ④ 和美が死ぬことへの覚悟がすでにできているということ

問四 傍線部(2)「その悪戯の悲しさに耐えきれなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

17

- ① 自分の死を利用する悪戯のあまりの非常識さに、このままメモを残すことへの罪悪感が強くなったから
- ② 機会が訪れずに、その悪戯が長い間気づかれないままになってしまう可能性を感じ取ってしまったから
- ③ 感謝を伝えようとする悪戯であったが、それがかえって夫を悲しませることになると気づいてしまったから
- ④ あえて死んだ後に感謝の思いを伝えようとする自分の行為が、あまりに悲劇の主人公めいていたから

問五 傍線部(3)「悲しさというより、悔しさのほうが強かった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- ① 和美が死んでいくことから目をそらそうとしていたのに、それを目の前に突き付けられたから
- ② せつかくすごい悪戯を仕掛けたのに、和美が自らの手でそれを台無しにしてしまったから
- ③ 和美の気持ちなど当然わかっていのに、まるで何も感じていないかのように扱われたから
- ④ 死んだ後のことにも気を遣っている和美に対して、自分自身のふがいなさを感じたから

問六 傍線部(4)「いまなら、わかる」とあるが、和美のどのような気持ちがわかるのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

19

- ① メモを破り捨てられてしまった悲しさと、死への恐怖を一緒に理解してほしいと思う和美のせつない気持ち
- ② 死が目前なのにもかかわらず、悪戯を仕掛けようとするユーモアと機知に富んだ和美の明るく朗らかな気持ち
- ③ 死への恐怖に打ちのめされることなく、残される家族のために心を砕くことができた和美の強くあたたかい気持ち
- ④ 感謝の思いをひそかに伝えようとしながらも、結局冗談めいてメモを見せずにいられなかった和美の気持ち

問七 傍線部(5)「それだけで伝わった」とあるが、何が伝わったのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

20

- ① 和美がもうすぐ亡くなってしまったこと
- ② 和美がついに亡くなってしまったこと
- ③ 和美の病気がさらに悪化してしまったこと
- ④ 和美の入院期間がさらに延びてしまったこと

問八 傍線部(6)「叱られているような気がした」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

21

- ① 健哉の「今すぐに会いに行きたい」という気持ちを無下にし、一人ゆっくりとお風呂に入る自分に後ろめたさを感じていたから
- ② 和美の死や健哉の悲しみに直面しながらも、何もなかったかのように日常的な行動をとってしまった自分に気がついたから
- ③ 和美のそばにいたり健哉をなぐさめることよりも、シャワーやリンスという日常の行動を守ることが重視していたから
- ④ シャワーを浴びリンスをするという日常の行動をとる中で、一時的にせよ和美や健哉のことを忘れてしまっていたから

問九 傍線部(7)「断ち切られた日常が、ここに、確かにあった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

22

- ① 和美との日々の一部だった日用品が目の前に存在することで、戻ってこない和美のいた日常をつきつけられてしまったということ
- ② 当たり前に存在していた和美のいる生活が、病気を患い入院生活を送らなければならなくなったことで中断されてしまったということ
- ③ 日用品を常に準備してくれた和美がいなくなることで、もはや何も心配せずに生活できた日々は失われてしまったということ
- ④ ずっと生活の中で使い続ける前提で準備された日用品を、和美の死により今後決して使うことができなくなってしまったということ

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)～(3)に示した熟語の同義語を完成するために、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、
 順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例) 進歩 〃

- ① 向
- ② 展
- ③ 良
- ④ 越
- ⑤ 好
- ⑥ 転
- ⑦ 発
- ⑧ 卓

(1) 助力 〃

- ① 貸
- ② 勢
- ③ 増
- ④ 魂
- ⑤ 胆
- ⑥ 推
- ⑦ 加
- ⑧ 補

(2) 看病 〃

- ① 観
- ② 福
- ③ 抱
- ④ 介
- ⑤ 患
- ⑥ 扶
- ⑦ 援
- ⑧ 祉

(3) 辛抱 〃

- ① 屈
- ② 守
- ③ 抗
- ④ 尽
- ⑤ 忍
- ⑥ 努
- ⑦ 耐
- ⑧ 慢

答 ② ⑦

(1) 23

(2) 24

(3) 25

問二 次の(1)～(3)の四字熟語を完成するために、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例) 免許

- ① 回
- ② 階
- ③ 皆
- ④ 解
- ⑤ 電
- ⑥ 田
- ⑦ 殿
- ⑧ 伝

答 ③
⑧

(1) 付和

- ① 礼
- ② 来
- ③ 靈
- ④ 雷
- ⑤ 銅
- ⑥ 堂
- ⑦ 動
- ⑧ 同

(2) 暗中

- ① 模
- ② 藻
- ③ 喪
- ④ 茂
- ⑤ 策
- ⑥ 索
- ⑦ 搾
- ⑧ 錯

(3) 我田

- ① 飲
- ② 因
- ③ 引
- ④ 員
- ⑤ 睡
- ⑥ 衰
- ⑦ 水
- ⑧ 遂

(1) 26

(2) 27

(3) 28

問三 次の(1)・(2)の慣用句の意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

(2)

(1) 足を向けて寝られない

① 不安で落ち着きがないということ

② ためらいの気持ちがあるということ

③ 怒りの気持ちがあること

④ 受けた恩を忘れないということ

⑤ 疲れきっているということ

(2) 手心を加える

① 相手の事情を考慮して寛大に扱う

② 物を加工して別の状態に作り変える

③ 細かいところまで配慮し丁寧に処理する

④ 工夫をこらして難しいことを簡単に行う

⑤ 自ら進んで世話をして大切に育てる

問四 次の(1)・(2)の四字熟語の漢字が誤っているものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 31

(2) 32

(1) ① 疾風迅雷 ② 泰然自若 ③ 東奔西走 ④ 色即是空 ⑤ 森羅万承

(2) ① 荒唐無計 ② 初志貫徹 ③ 品行方正 ④ 天地神明 ⑤ 玉石混交

